

行政で幹部が頭を下げないというような最近の事態を思うに、個人が肝心なところで一部良心を踏み外してるんじゃないか。個人の良心を売った部分が組織に集積していくみたいな感じがして、組織のために判断することが絶対要件みたいなことに組織自身がなってしまう。社会が変わっていくときに、変えられるのは個人で、個人自身がどこか重要なところでちゃんと自分の意見を言わないといけないのに、いろんなことを考えて、「まあ、いいか。」みたいな判断の積み重ねが問題を起こしている。大嘘言ってる人は少ないと思うんだけど、その蓄積自体が日本中の土木界の根本的な問題となり、消えない。それがこの活動を通じて実感としてわかったことです。

西田 だいたい土木技術者は他の職種以上に、組織の鎧を着て話をしないといけないことが多いんですけど、FCCの場合は参加するとすぐに何回か飲み連れて行かれて、鎧を脱がされるんですね。「お前はいったいどういう立場でこの活動してるんや。」って。いつも隅野さんの役目でしたね。

隅野 だけど、土木を選んできた奴って、脱がしても面白い奴が結構多い。もちろんそういうのが服を着て喋らなあかん会合もあるけど、このFCCの場では服脱いで、自分が土木技術者としてどういうものかという、そういうことをいっぱいやった。だから面白かったんやと思う。

西田 議論していると、自分自身の中の倫理観が何度も何度も試されるんですね。「お前は、それでええのか」って。

河田 僕はこの活動っていうのはFCCの中で留まってるんじゃないくて、当時の関西支部の活動の中に浸透していったと思うんだよ。伝統的に関西支部っていうのは全国の支部の中でもトップのアイデアを出してたじゃない。

◇女房にわからんもんは市民にもわからん。

隅野 当時、Doboku TALK (FCCのシンポジウムの呼称)の意義についての考え方が三つあって、一つは「土木人が考えてきたことを一般市民に如何に理解してもらおうか。」、もう一つは「市民がどんなことを考えているのか教えてもらうために。」、その真ん中に「市民と土木と一緒にあって、何かを創り出すんだ。」というのがあった。大抵の場合は、偉い人が市民にわかってもらうためにシンポジウムなんかをやるんですが、FCCでは、その三つの意見が平行で走ってましたね。それは結構このFCCサロンをやる上で各人のスタンスとして、非常に大事だと思います。

河田 それから市民、市民という前に、自分の家族に認知されてるのかと。女房も子どもも連れて来いと、こういうところがあった。お父さんが何やってるのかわからんということじゃ困るから。自分の最大の味方は男の場合は女房じゃない。女房が味方じゃないんじや、市民が認めてくれるはずな

いやないかと。だから家族連れでやったこともあったよね。

◇関西支部の中のFCC

川谷 私はFCCの二代目の代表幹事を、'93年、'94年にやらせていただきました。それ以降、何らかの形でこのFCCに関わってきて、自分自身のためにやってきたようなところがあります。

当時から、関西支部というのは土木学会の中でも非常にユニークな支部で、組織も一番しっかりしてると。ですから、私自身は、このFCCは実益的なものは全くないにしても、将来を見越して関西支部が養う…というのは変だけど、それぐらい囲って泳がしたらいいじゃないかという意識はありました。

ただ、私も執行部も2年単位で代っていきますので、その時々の方針で、勝手なことをするなと後ろから矢を打たれるような雰囲気の時も何度かありました。あるときはFCCなんか潰したと、直に言われたこともありましたが、潰せるものなら潰してみいて。もし予算ゼロだってやるよと。

ただ、支部の中の位置づけはあったほうが、われわれとしても動きやすい。会社では「学会の仕事ですねん。」と言えば、ある程度許してもらえるところがありましたしね。

河田 物事進めるには戦略がいるんだよね。将来を見通しておかないとだめだと思ふんだよ。このFCCがうまくいってるのは、戦略上、行き着くところを考えてたでしょう。それは、各人がどこに着地するかというのを、それぞれが持ってたと思うんですよ。僕自身も、直接FCCにコミットしない状態になっても、そのやり方というのは踏襲してるもん。何も変わってないですよ。情熱も大事だけど、その下にはきちっと将来を見通せる戦略がないと、情熱だけではムリですよ。FCCというのは自分が主体的にそれにコミットして、それをどう膨らませていくかというプロセスを勉強するにはものすごくいい組織だったと思うね。



川谷充郎 氏

第2部 これからどうする？

◇今の土木界に欠けているもの

河田 いま土木界で一番欠けてるのは希望だよ。希望があれば我慢できるんだよな。そのときに何をすべきかということを考えてもらったらいい。公共事業費がトレンドとしてどんどん削減される中で、一体、土木にとっての将来の希望が何だっていうことをみんなもっと真剣に考えないといけない。仕事なくなる、なくなるっていうようなところで右往